

## 新しく発見された坪井信道から緒方洪庵への書簡

高橋 伸明

福岡記念病院

この度、坪井信道から緒方洪庵宛の書簡が新しく発見されたので報告します。

原文：六月比 先日拙事書状遣候節ハ上野俊之丞と申方ニ滞留いたし候由来候、当時ハ如何  
(時候の挨拶につき省略)

然ハ此度長崎表宮本元■方へ、要書一通相送申度候処、何レヘ向テ差出候而宜敷可有候や相分り不申候ニ付、無抛貴家様へ向相願差上申候ハ多用之中何共乍御面倒同子方へ早速相届可申方へ向ケ御差出し被下候様奉希候、賃銭ハ大阪より長崎まで先払ニ被成御遣し可申候

先月下旬一書啓上いたし候、定而御手可被下と奉存候、尤再便ニ差出候間、延日可仕かも難計奉存候、扱近日川本幸民より■候へハ御小児様にも御不快之由是も他より不図■候趣暁トハ相分不申候、実否如何と家内一統■■案申上候、後信委敷ハ左右■度奉存候、小児之病氣と申ものハ自身ニ煩ひ候よりも心配なるものニ御座候、何■訛伝ナレハ宜敷ト存し為■候

浄泉よりも此間久振りニ而便有し候処、何も異状無し今以舌痛い向■々よし申来候、如何之事ニ候や是又御序ニ御聞カセ可申候、■年段々御厄介ニ相成候よし御座候、一旦痢疾ニかゝり候よし、然ル処寄動も無之候ニ付又々老兄へ相願申度などゝ申来候、定而御世話ニ相成候事と奉存候、何分可然奉願上候、右貴■折書状相願度如此御座候、時候次第寒天ニ相向候御■■専一ニ奉存候、恐々謹言

九月五日夜 坪井信道

緒方洪庵様

概要：坪井信道が門下生である緒方洪庵に手紙の受け渡しを依頼した書簡。

冒頭で上野俊之丞宅に滞留し、お世話になった近況を確認し報告している。

長崎にいる宮本元■に手紙を送りたいが宛て先がわからないので、洪庵に送付を依頼してる。託した手紙は子供の病気で心配している相手を安心させるようなことと、知人?の病状や自身?の健康状態によってはまたお世話になるかも知れないことなどを伝えている。

解読が困難で、どなたか正確に解読して戴きたい。

興味深いことに、この書簡の中で五人の人物が出る。上野俊之丞：天保十二年六月一日に薩摩藩主島津斉興の世子斉彬の日本で初めて写真撮影に成功、坂本竜馬を撮影した上野彦馬の父親。宮本元■：不明。川本幸民：日本の化学の祖で、初めて科学という言葉を使用した、日本で初めてビールを試醸。坪井信道：緒方洪庵の師、「安懐堂」という塾を開く。門下生に緒方洪庵・杉田成卿・青木周弼・川本幸民・黒田良安らがいる。緒方洪庵：周知。

わかっている四人の人物はすべて蘭学医で、当時の蘭学医の交流が垣間見える。

私の妻が杉田玄白から数えて七代目にあたり、この書簡が発見された。前述の杉田成卿は玄白の孫である。